

報恩講ほうおんこう



河田町報恩講

浄土真宗の開祖、親鸞しんらん聖人の遺徳を偲しのび、またその恩に報ずるという意で、小松地方では、ホンコサンと親しみを込めて、報恩講が各地域で行われる。まず各寺院で、十月から十一月にかけて、真宗門徒によって、報恩講が営まれ、その後、若い衆や嫁、あるいは爺婆など、それぞれの年代の者が集まり、ツレボンコやワカシユウボンコと呼ばれる報恩講が各地区毎に行われた。

額見地区では十一月十一日、マワリボンコといい、春マワリ（二月二十二日）と共に、この日、法専寺や照厳寺の伴僧や住職によって秋マワリと称して、地区の各家を廻ることが行われていた。また十一月十四日には、地区の人々が、手次ぎ寺院である福井県あわら市清王にある真宗寺院、照厳寺（元



稱名寺門前の風景を描いた岩田健三郎氏作イラスト 乳母車を曳きながら御詣りする老女の信仰の深さに驚かされたという遠来の人が、その感銘を絵に表した。



平成22年(2010)11月に営まれた家報恩講(岩測町)



岩測町の報恩講(故山口武氏提供) 岩測町では今でもすべて手作りで、御齋の準備をし、お参りの後は皆さんでいただく。中でも、小豆汁(左写真)は、開祖親鸞聖人の好まれたものとして必ず作っている。

二十七日の夜は「お初夜」と称して、親鸞聖人の遺徳を偲んだ。
(高桑守史)

は二ツ梨にあったという)にお詣りに出かける。以前は粟津から細呂木まで鉄道に乗り、その後は一里半の道を寺まで歩いて詣でたが、今はバスをしながら、地区の人々がそろって出かける。寺院では、午前中、正信偈の唱和や

説教の後、お昼にお齋をいただき、午後には、ご伝鈔が拝読されたという。また地区の道場を中心に、マツイボシも行われ、厄年後の二十五歳から二十七歳までの者がそれぞれ一団となり、これをヒトツレ(二連)と称し、

同行衆として、初穂や盆・正月と共に、報恩講をお勤めした。十一月二十二日から二十八日までを、オヒツチャ(お七夜)といい、親鸞聖人の祥月命日に当る二十八日までの七日間は、生臭(なまぐ)さを断ち、精進し、